

Special Feature

エンニオ・モリコーネ特集

『モリコーネ 映画が恋した音楽家』公開記念

2023年1月13日より、ジュゼッペ・トルナトーレ監督による映画音楽の巨匠、エンニオ・モリコーネの葛藤と栄光に迫る圧倒的音楽ドキュメンタリー『モリコーネ 映画が恋した音楽家』が公開された。本誌編集長も大のモリコーネファン。特にモリコーネが音楽を手掛けた名作『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』（1984）、『アンタッチャブル』（1987）、『ニュー・シネマ・パラダイス』（1988）の3作品はお気に入りの映画だ。

生前、イタリアで活躍するベーシストを通じて、モリコーネへの取材を打診してもらったことがあったが、2020年7月6日に91歳でこの世を去った。夢は叶わなかったが、公開された『モリコーネ 映画が恋した音楽家』を見て、モリコーネに会えた気がし、改めてモリコーネの音楽愛に心から感動&感激した。モリコーネの音楽は永遠です！

【文：加瀬正之／資料提供：株式会社プレイントラスト】



写真提供：株式会社プレイントラスト

『モリコーネ 映画が恋した音楽家』

ジュゼッペ・トルナトーレ監督（『ニュー・シネマ・パラダイス』）が映画音楽の巨匠、故・エンニオ・モリコーネの葛藤と栄光に迫る圧倒的音楽ドキュメンタリーは、モリコーネが自身のドキュメンタリー映画製作に際して、「ジュゼッペが撮るならやってもいいが、彼以外ならダメだ」と答えたという。それを聞いたトルナトーレ監督が快諾し、本作のプロジェクトがスタートし、公開に至った。

このドキュメンタリーでは、今も皆の中に生きている素朴でありながら並外れた人物モリコーネの実像、天才の“創作の秘密＝作曲と実験”に迫っており、マエストロの人生において決定的な人物、バラエティに富んだインタビューの選定、深い絆で結ばれた盟友との終わりなき探求など、見事な構成と感動的なシーンと素敵な音楽でモリコーネを描いている。

意外に知られていないが、モリコーネは元々トランペット奏者だった。「音楽が“運命”になると思っていた。私は医者になりたかったが“トランペットを学べ”と父が言い、私を音楽院に入学させた。トランペット奏者になると決めたのは父だ」（本編字幕より）と語られている。

ジャンルを超えて音楽界からも数多くのアーティストが出演しており、『続・夕陽のガンマン』から多大なインスピレーションを受けたと語るブルース・スプリングスティーン、『死刑台のメロディ』主題歌を担当したジョン・バズ、ライブのオープニングに『続・夕陽のガンマン』や『ゴールドの恍惚感』を使用しているメタリカのジェイムズ・ヘットフィールドの他、ザ・クラッシュのポール・シムノン、クインシー・ジョーンズ等のコメントにもモリコーネへの敬意や愛情を感じる。ジャズファンには、ライブや作品で『ニュー・シネマ・パラダイス』を披露しているジャズ・ギタリストのバット・メセニーのコメントも興味深い。以下は作品の中で登場するコメントの一部だ。

「いまだに独特な存在」～クリント・イーストウッド

「信じてたいくらい、彼は素晴らしい」～クインシー・ジョーンズ

「俺は巨匠の音楽の精神性に手を伸ばした」～ブルース・スプリングスティーン

「彼は制限を突破する、反逆精神の持ち主だ」～ジェイムズ・ヘットフィールド（メタリカ）

映画&音楽ファンは勿論、エンニオ・モリコーネの存在を知らない若い世代の人たちにぜひ観て欲しい。音楽に人生を捧げ、映画が恋した偉大な音楽家、映画音楽の巨匠、エンニオ・モリコーネを体感できる素晴らしい作品だ。

モリコーネ

映画が恋した音楽家

『モリコーネ 映画が恋した音楽家』

全国順次公開中

©2021 Piano b produzioni, gaga, potemkino, terras

配給：ギャガ

ジュゼッペ・トルナトーレ監督が
映画音楽の巨匠、故・エンニオ・モリコーネの
葛藤と栄光に迫る圧倒的音楽ドキュメンタリー

■スタッフ・キャスト

監督：ジュゼッペ・トルナトーレ
『ニュー・シネマ・パラダイス』『海の上のピアニスト』

出演：エンニオ・モリコーネ、クリント・イーストウッド
クエンティン・タランティーノ、ベルナルド・ベルトルッチ
ウォン・カーウアイ、ハンス・ジマー、ほか

原題：Ennio

157分/イタリア映画

カラー/シネスコ/5.1ch デジタル

字幕翻訳：松浦美奈

字幕監修：前島秀国

配給：ギャガ

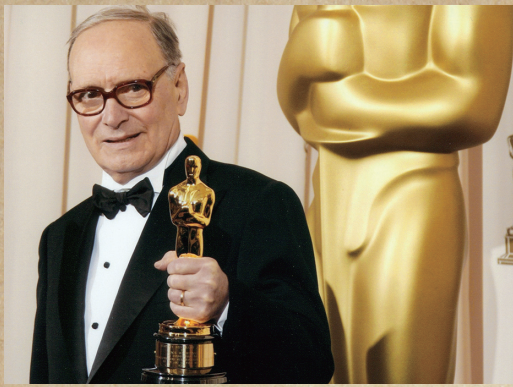
公式HP：<https://gaga.ne.jp/ennio/>



【エンニオ・モリコーネ/Ennio Morricone】

1928年ローマ生まれ。幼少期よりトランペットを習い始め、サンタ・チェチーリア音楽院で作曲を学ぶ。同音楽院卒業後、伊RCAレーベルの看板アレンジャーとして活躍し、『Il Federale (ファシスト)』(61)で単独名義による映画音楽作曲家デビュー。セルジオ・レオーネ監督とのコンビ第1作『荒野の用心棒』(64)が世界的な注目を集め、以後『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』(84)までレオーネの全監督作で音楽を担当。『ニュー・シネマ・パラダイス』(88)で初めてタグを組んだジュゼッペ・トルナトーレ監督とは『ある天文学者の恋文』(16)、映画音楽での遺作までコンビを組み続け、生涯に500本以上の映画・テレビ音楽を手がけた。『ヘイトフル・エイト』(15)でアカデミー賞®作曲賞受賞、『天国の日々』(78)『ミッション』(86)『アンタッチャブル』(87)『バグジー』(91)『マレーナ』(00)で同賞ノミネート、2007年アカデミー賞®名誉賞受賞。2020年、91歳で逝去。





★モリコーネの同級生

エンニオ・モリコーネは1928年11月10日生まれ。1928年生まれの著名人には漫画家の手塚治、俳優の渥美清、女優のジャンヌ・モロー、未来学者のアルビン・トフラー、革命家のチェ・ゲバラ等がいるが、本誌由来のジャズ・ベームス、リロイ・ヴィネガーも1928年生まれで、モリコーネの約4ヶ月前7月13日に誕生した同級生にあたる。

★モリコーネとアカデミー賞

モリコーネは1950年代末から映画音楽の作曲、編曲、楽団指揮を始め、映画音楽家デビューは1960年の『歌え！太陽』と言われていたが、オリジナルのスコアを使用した映画は1961年の『ファシスト』で、こちらがデビュー作と言われるようになった。1969年には映画21作もの音楽を書いたというモリコーネ。アカデミー賞の作曲賞には1978年に『天国の日々』、1986年に『ミッション』、1987年に『アンタッチャブル』、1991年に『バグジー』、2000年に『マレーナ』、2015年に『ヘイトフル・エイト』と、計6回にノミネートされた。今年1月より公開されたドキュメンタリー『モリコーネ 映画が恋した音楽家』の中で、なかなか受賞には至らなかったエピソードも描かれているが、2006年に名誉賞、2015年に『ヘイトフル・エイト』で待望の作曲賞を受賞し、世界中が感動し称賛の声が上がった。

★モリコーネとジャズ

モリコーネの父親マリオ・モリコーネはトランペット奏者で、どんな音楽でも演奏したジャズ・トランペッターだったと言われている。ドキュメンタリー映画『モリコーネ 映画が恋した音楽家』の中で、「私は医者になりたかったが“トランペットを学べ”と父が言い、私を音楽院に入学させた。トランペット奏者になると決めたのは父だ」と語られている。父親の影響でモリコーネの音楽にもジャズテイストが感じられる楽曲がある。1980年に公開されたイタリア映画『青い目の強盗』もモリコーネが音楽を手掛けており、モリコーネのジャズサイドの魅力がひとときわ輝く秀作と言われている。メインテーマ「Città Viva」は、モリコーネが選んだビッグバンドとトリオのソリスト用に美しいアレンジが施されており、友人でもあるジャズ・ミュージシャン、エンリコ・ピエラヌツィ（ピアノ）、ロベルト・ガット（ドラム）、リッカルド・デル・フラ（コントラバス）が参加している。



© Luca Mazzone



★モリコーネと日本

モリコーネは日本とも縁が深い。2003年にNHKの大河ドラマ『武蔵 MUSASHI』の音楽を担当し、翌2004年6月に来日。6月4日（金）～6月6日（日）の3日間、東京国際フォーラム・ホールAで初来日公演を行った。また、2019年には旭日小綬章を受章。2022年10月にはモリコーネが手掛けてきた名曲の数々を演奏する【エンニオ・モリコーネ『オフィシャル・コンサート・セレブレーション』】のワールド・ツアー初演が日本で開催された。同公演の指揮者はモリコーネの実の息子のアンドレア・モリコーネで、都内のイタリア大使館にて、ジャンルイジ・ベネデッティ駐日イタリア大使と共に公演に向けた記者会見に参加した。

★モリコーネの息子

モリコーネの息子、アンドレア・モリコーネは作曲家・指揮者・ピアニストとして活躍している。昨年2022年11月5日（土）& 6日（日）に行われた【エンニオ・モリコーネ『オフィシャル・コンサート・セレブレーション』】で指揮者として来日し、父親も初来日公演を行った東京国際フォーラム・ホールAのステージに立っている。10歳で父のような作曲家になりたいと決意し、24歳で『ニュー・シネマ・パラダイス』の「愛のテーマ」を共作。音楽を愛したジャズ・トランペッターの祖父マリオ・モリコーネ、そして、父エンニオ・モリコーネの血を受け継いでいる。

★愛妻家モリコーネ

モリコーネは愛妻家としても知られている。妻のマリアとはモリコーネが学生時代に出会い、27歳で結婚した。モリコーネの芸術活動を支えたのは妻のマリアで、モリコーネが作曲に専念できるように献身的に支え、候補曲が出来上がると、モリコーネはそれを全てマリアに聴かせるようになったことは、『モリコーネ 映画が恋した音楽家』でも描かれている。そして、2007年にアカデミー賞特別功労賞を受賞した際には、ステージ上のスピーチで「このオスカーを、大いなる献身と愛情を持って、長年私のそばに常にくれた妻のマリアに捧げたい。マリア、君への想いは変わらない！」と、愛妻マリア夫人に感謝の言葉を捧げ、感動を呼んだ。

